

# ショーペンハウアー 『充足根拠律の四方向に分岐した根について』初版について — もう一つのショーペンハウアー伝 —



関西学院大学名誉教授 鎌田 康男

関西学院大学図書館は、2015年度に、アルトゥア・ショーペンハウアー（1788～1860）の処女作『充足根拠律の四方向に分岐した根について』（1813、以降『根拠律』と略記）初版を購入した。本図書館はすでに主著『意志と表象としての世界』初版（1818/1819、時計台 No.84、pp.14-19 で解説）を所蔵するが、2015年には大幅に改訂増補された『意志と表象としての世界』第2版も取得した（神戸三田キャンパス図書メディア館に所蔵）。これらショーペンハウアー研究にとって最も重要な3冊の原典を所蔵するのは、日本では関西学院大学のみであり、本学は、日本随一、世界的にも重要なショーペンハウアー研究の拠点となった。

これらの原典3冊は、2015年11月に本学で開催された日本ショーペンハウアー協会全国大会参加者のために図書館内に展示され、全国のショーペンハウアー研究者の大きな注目を引いた。なお、この展示会においては、同じく関西学院大学図書館が所蔵するカント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルなどドイツ哲学の主要著書の初版本も陳列された。

以下、本稿では、筆者独自のリサーチを含め、当時の

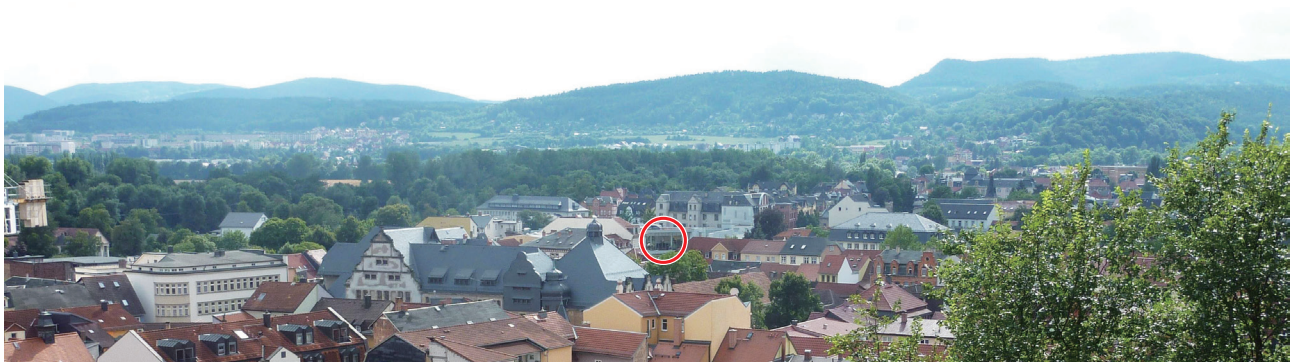
政治経済的状况との関係をも考慮しながら『根拠律』の執筆に至るまでのショーペンハウアーの修業時代に新たな光をあててみたいと思う。



ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』初版、第2版および『根拠律』初版（写真中央）その左右には、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルなどドイツ哲学の主要著書の初版本（関西学院大学図書館の貴重資料コレクションより）

## 1. 幼少期：ダンツィヒからハンブルクへ

アルトゥア・ショーペンハウアーの父ハインリヒ・フローリス・ショーペンハウアー（1747～1805）は、自由ハンザ都市ダンツィヒ（現在のポーランド・グダニスク）を拠点に、ハンブルクやロンドンなどヨーロッパのハンザ諸都市



ハイデックスブルク宮殿からのルードルシュタット市街及び近郊の眺望  
写真中央○は、ショーペンハウアーが『根拠律』を執筆した騎士館跡に立てられたショッピングセンター「ガレリア」のガラス張りの近代建築

を中心に交易を行う貿易商であった。ハンザ都市は中世に起源を持ち、国王や皇帝から政治や経済に関する自治権を認められ、地域の領主の支配をうけない、独立国のような存在であった。宗教改革期にはオランダから迫害されたプロテスタント・メノナイト派市民を受け入れたため、オランダが世界貿易の大国となると、その交易ネットワークからも大きな恩恵を受けた。ハインリヒ・フローリスの母、つまりアルトゥーア・ショーペンハウアーの祖母もオランダ人であった。自由市民ハインリヒ・フローリスは、既成の秩序や慣習にとらわれず、自力で政治経済の趨勢を把握し、未来を予測しながら新たな商品、新たな市場、新たな経営スタイルを開発する典型的な近代的経済人としてショーペンハウアー商會を繁栄に導いた。その実務能力は、彼の広汎な教養によって支えられていた。



ショーペンハウアーの生家 ダンツィヒ聖霊通り 114 番 (左から 3 軒目)

プロイセン、ロシアによる第二次ポーランド分割の結果、ダンツィヒも 1793 年、プロイセン王国の支配下に入った。フリードリヒ大王からは、王国内におけるショーペンハウアー一家の財産、移動、取引のあらゆる権利と自由とを保障するという慰留状が交付されたが、自由思想の持ち主であったハインリヒ・フローリス・ショーペンハウアーは、国王が統治するプロイセン領内に留まることをよとせず、財産の 10% の没収に加え、莫大な移転費用を払って、ハンブルク移住を強行した。アルトゥーアが 5 歳の時である。ハンブルクはハンザ都市のなかでも思想の自由が尊ばれ、市民のフランス革命への共感も強かった。ハンブルクに

移れば、これまでの重要な交易相手であるロンドンやオランダに加えて、フランスや、独立を達成したばかりのアメリカ市場との距離も縮まり、取引の新たな展開も望める。それによって、ダンツィヒ撤退の巨額な損失を補えるという計算も働いていたにちがいない。

イギリス通のハインリヒ・フローリスは、『タイムズ』紙 (ショーペンハウアーが生まれた 1788 年にロンドンで発刊) の購読を欠かさなかった。その習慣をアルトゥーアは父から引継ぎ、哲学者となつてからも終生『タイムズ』を読み続けた。ハインリヒ・フローリスは、身重の妻ヨハンナ (1766 ~ 1838) を伴ってロンドンに渡つてもいる。息子がロンドンで生まれ、イギリスの市民権を得れば、ショーペンハウアー父子がドーヴァー海峡の両岸に商社を構えることができる。これが実現したなら、商會にとってどれほど有利な状況になつただろう。しかし異国での出産への不安が募るヨハンナの頑強な抵抗によって一家は再びダンツィヒに戻ることになり、この計画は失敗した。いずれにせよ、そのような型破りで、時に冒険的な思考を支えていたのが、ショーペンハウアー家の近代的教養であった。ショーペンハウアーの母ヨハンナも多言語を駆使する才女で、後に女流作家となったが、当時知名度では息子を凌いでいた。

かつて学術文芸は、政治や宗教に関わる王侯貴族や聖職者などの特権階級、および彼らの顧問官として召し抱えられた文人たちが、目先の利益にとらわれない広い視野をもつための、思考訓練の一環と考えられていた。日々のなりわい — 経済活動にいそしむ下々の民には学術文芸は不要のものとされた。しかし近代に入ると、ルネサンスや宗教改革、大航海、そしてイギリスやアメリカにおける民主主義の芽生えなどに認められるように、商工業にたずさわる一般市民が広い視野から政治や宗教に発言力を



40 歳の父ハインリヒ・フローリス・ショーペンハウアー (1787 年)

行使する機会が増加した。それとともに学術文芸の修得が一般市民の間でも必要になり、また尊ばれるようになった。教養市民のための書籍や新聞が次々と刊行され、市民に開かれた劇場なども建設されるようになった。ちなみに教養市民の台頭は、ヨーロッパだけではなく、近代化の道を歩み始めた日本の江戸時代中期以降の商工業や農業にたずさわる平民階級にも認められる。世界史的な視野から見ても、目の利益と享楽とを追い求める民を、視野の広い「教養市民」へと育成することのできた社会のみが、近代資本主義の担い手となったという事実を、教育研究者のみならず、経済人や政治家も肝に銘ずるべきであろう。21世紀にはいって、世界の変化はめまぐるしさを増し、自然、社会、政治、文化のさまざまなレベルで予測困難な危機状況が頻発するようになっている。これらの状況に対処できる、スケールの大きな自立的知性の育成は、知の総合を目指すべき大学（ユニヴェルジタス）の使命であったはずだ。今や個別的なスキル学習の専門学校となりつつある大学に、どのようにして再び世界的視野を備えた教養市民の育成機関としての使命を自覚させるのか、日本における大学の理念が問われている。

話をショーペンハウアーの幼少時代に戻すなら、一般市民が政治、経済、文化に関わる大きな決断を下さなければならぬ、ということは、既成のものの方々に無批判に追従するだけでは不十分だ、ということである。自分自身で考え、自らの拠り所と生き方を見出してゆかなければ、厳しい現実にもあそばれる根無し草になってしまう。こうした西欧近代的な人生観をアルトゥーアは、父の背中を見ながら身につけていったのである。ハンブルクに移住すると、ショーペンハウアー家は新たな人間関係、取引関係を築くために、社交生活を活発化し、市の要人や文人たちが出入りするようになった。

その結果、アルトゥーアの知的刺激は増大し、特に文芸、芸術のセンスは大いに磨かれた。しかし、家族の水入らずの関係は外向きの生活の犠牲になることが多かったようで、少年期の生活では孤独を感じるが多かったと、ショーペンハウアーは晩年に回想している。

ハンブルクでのショーペンハウアー家の再出発は、当面順調に進んだ。父ハインリヒ・フローリスは息子を優れた国際派ビジネスマンに育て、貿易商を引き継がせたいと願っていた。1797年、9歳になったアルトゥーアは、父のフランスでの取引仲間であるル・アールのプレシメール家に預けられる。当時の国際語であったフランス語能力を母国語レベルに高めること、家族に頼らずに道を切り拓く自立心を育てること、見知らぬ人と良好な人間関係を築き上げる力を育てること、息子を預けることによってプレシメール家との盟友関係を強めること、などが目的であったろう。実際、同家のアンティム少年との交友はその後何十年も続いた。さらに、フランス革命をとおしてヨーロッパ全体への影響力を高めたフランスとの絆の強化の必要性、ル・アールがフランスにおける対アメリカ貿易の拠点であるという、ハンブルクとの共通性も当然考慮されていたにちがいない。しかしナポレオン・ボナパルト（1769～1821）が遠征中のエジプトに釘付けされた1798年末に第二次対仏大同盟が結成されて、ヨーロッパ大陸は再び不安定化し、総裁政府下フランスの治安も急速に悪化した。翌1799年春には、アルトゥーアはハンブルクに呼び戻された。両親の指示に従って、郵便馬車への襲撃の頻発する陸路よりも、イギリスに制海権を握られてはいても、フランスからオランダの海岸線に沿ってハンブルクに向かう海路を選んだ。同年秋、エジプトから帰還したナポレオンのプリュウメールのクーデター以降、ヨーロッパの混乱と緊張とは頂点に達したが、しかし、ナポレオンの総領就任以降、フランスは再びヨーロッパ大陸における軍事的な優位を確立していった。そのようなヨーロッパ大陸におけるパワーバランスのめまぐるしい変化に、ショーペンハウアー家、およびショーペンハウアーの人生は翻弄されてゆくのである。

## 2. ナポレオン支配下のヨーロッパ旅行

父ハインリヒ・フローリスは、上述のように息子が実業家として跡を継いでくれることを願っていた。しかしアル

トゥーアは、幼い頃から親しんだ文芸的な環境に影響され、また当初学んだ上流市民の師弟のための実業学校の授業に飽き足らず、次第に大学に進んで学問を修めたいと願うようになった。実業学校の校長ルンゲ博士も、この聡明な少年に学者の道を歩ませることを両親に勧めている。ショーペンハウアー自身の回想によれば、父は息子の強い嘆願に対して、次のような提案をしたとされる。「おまえがもしどうしても大学に進んで学問をしたいと言うなら、それも認めよう、しかしもし実業家になって跡を継いでくれるのなら、見聞を広めるために、家族で楽しく、何年でもヨーロッパの観光旅行をしようではないか」と。少年ショーペンハウアーは、このヨーロッパ旅行の提案を受け入れ、実業家になることを承諾した、という。しかし筆者は、この後述べるような理由から、父が息子を心変わりさせるためにヨーロッパ旅行を計画したのではない、少なくともそれが旅行の第一

の理由ではなかったと考えている。感受性が強く、聡明な14歳の少年ショーペンハウアーが、ヨーロッパ旅行の魅力に惑わされて、学者になるという本来の願いを忘れてしまったとも考えがたい。むしろ、息子が実業家になること



14歳のアルトゥーア・ショーペンハウアー（1802年）

を強く願う父親の気持ちを知っていた少年ショーペンハウアーは、賢い思春期の少年によくあるように、このような提案に乗せられたふりをするという選択によって、自分の気持ちを、尊敬する父の願いと摺り合わせていったのであろう。ハインリヒ・フローリスの提案に無邪気に喜びはしゃいだのは母ヨハンナのほうであった。

このヨーロッパ周遊旅行のさまざまな経験を、少年ショーペンハウアーは旅日記に詳しく記録している。それは、単なる見聞録の域を質、量的にも遙かに超えて、ショーペンハウアーの人生観、思想的萌芽を感じさせるものである。そして、ショーペンハウアーの思想形成が、彼の生き

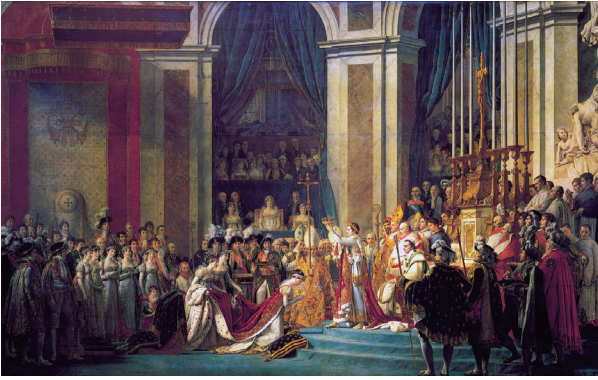
た時代状況と密接な関係にあることをも伺わせてくれる貴重な資料である。

さて、いまショーペンハウアー家が出発しようとしているヨーロッパ旅行は、一年半余りの長い旅行となるのだが、この旅の始まりを見ても、それは家族水入らずの娯楽旅行とはほど遠いものであったことがわかる。1803年5月3日、ショーペンハウアー一家は、ハンブルクを出発した。おりしも、ナポレオンの総領就任と共に訪れたかに見えたヨーロッパの一時的平和が再び揺らぎだし、イギリスがアミアンの和約を破棄して英仏が戦争状態に入らんとする、まさにそのときであった。ハンブルクからオランダを通過する旅は平穏であったが、一家はイギリスに渡るフランス・カレーの港で、英仏戦争の現実と直面する。アルトゥーア少年は旅日記に、船が港を出た後に、戦争勃発のためにもはや出港を許されなかった別の船の乗客たちが、荷物を残して着の身着のままボートで自分たちの船に乗り移ってきた様子を記している。

父ハインリヒ・フローリスがこのような切迫した状況の中で旅行に踏みきり、しかも戦争状態の中であえて敵国イギリスを目指したことは、第一の目的が楽しい観光旅行などではなかったことを示している。フランスは、イギリスの経済封鎖を目指していたので、英仏の国交断絶はイギリス貿易を重視するショーペンハウアー商会にとってはあらゆる意味で大きな痛手であった。それゆえにハインリヒ・フローリスは危険を冒してでもイギリスに渡り、現地でこの危機に対処しようとしたのであろう。

### 3. ショーペンハウアー哲学の萌芽

ショーペンハウアーは、父の努力と気配りの人生を見ながら、この世界には確固とした秩序が存在するものではなく、ただ既成の秩序から自由になった個人が知力と意志力とによって実現するものだけが現実のものになるのだ、という啓蒙主義の思想を、身をもって学んでいったと思われる。主著『意志と表象としての世界』（1818/1819）で展開されることになる、「世界は私の表象であり、私の



ジャック＝ルイ・ダヴィッド「ナポレオンの戴冠式」

意志である」というショーペンハウアー哲学の主要命題は、このような学びの中で準備されていったものであろう。

しかしこの近代市民の自由は同時に、救いのない孤独をも意味する。この世界には確固とした秩序の支えがない、という意識は、誕生と死とによって無から一時的に切り取られた生を、孤独の深淵から救い出してくれるものはない、という存在のはかなさの意識と重なりあう。そこに、ショーペンハウアー哲学に流れる悲観的な雰囲気源流がある。しかし自由であるがゆえに孤独でもある、という現実を直視することによって、近代人はその運命と使命をつかみ取ることができるのだ、とショーペンハウアーは考えた。それは、際限なくふくらむ意志の自由の抑制—意志の否定をとおしてのみ、愛と心の救済とに到達することができる、という思想である。

#### 4. ハンブルクの青年ショーペンハウアー

ショーペンハウアー家はイギリスに5か月半滞在した。ロンドンでアルトゥーア少年は、名所を訪ね、父と親しい上流市民たちの知己を得た。英語に習熟し、ロンドンの土地感を養うためにも十分な期間であったろう。このうち約3か月間、当時は人口1500人の、まだクリケットともテニスとも縁のないロンドン近郊の村だったウインブルドンに寄宿し、イギリス国教会司祭ランカスターの主催する「若い貴族紳士のためのウインブルドン学校」に学ぶ。この学校は、同じキリスト教教育であっても、自由都市ハンブルクのルンゲ博士の学校と比べるとはるかに厳格な校風

で、アルトゥーアは居心地の悪さを両親や友人への手紙でしきりに訴えている。父ハインリヒ・フローリスはアルトゥーアをこのエリート校に送ることで、ロンドンの取引仲間たちに対し、息子を教養あるジェントルマンとして印象づけようとしたにちがいない。その後ショーペンハウアー家は船をチャーターし、フランスのカレーを避けて一旦オランダに戻り、そこからパリに向かった。パリの長い滞在期間中に、アルトゥーアは、幼友達アンティムのいるル・アーブルを訪ねてもいる。

旅の途中、少年ショーペンハウアーは一般民衆の貧困や苦難を目の当たりにし、ロンドンでは公開絞首刑、トゥーロンではガレー船奴隷たちの過酷な運命を見て、衝撃を受けている。アルトゥーアに世界のありのままの姿を見せるのが父ハインリヒ・フローリスの教育方針であった。このためにショーペンハウアーは、一方で民族や階級の枠を越えて、世界市民の教養を身につけつつ、他方で自由と孤独との矛盾に苦悩する青年となってゆくのである。

1804年に入ると、ヨーロッパにおけるナポレオンの優位は決定的なものとなり、フランス主導によるヨーロッパ新秩序の安定的支配が期待されるようになる。ハンブルクはフランスと対仏同盟側との中立を宣言し、市街を取り囲む城壁を撤去して、非武装中立の道を選択した。さまざまな制限下ではあるが、イギリスとの交易都市としての地位も守られるかに見えた。この時期にあわせるようにショーペンハウアー家は周遊旅行を終え、父は9月にハンブルクに戻って国際的な取引を再開することになる。その間アルトゥーアは母ヨハンナとともに生まれ故郷ダンツイヒを訪れ、かつて洗礼を受けた聖マリア教会で堅信礼を受けて大人の仲間入りをし、同時に短期ではあるが、当地で商社の見習いを始めた。そして同年12月、ナポレオンが皇帝として自己戴冠する直前にハンブルクに戻り、ハンブルク参議イェーニシュの商会で実業家修行を始めたのである。

こうしたショーペンハウアー家の動きと、彼らが生きた世界との密接な関係を知るほどに、ひとりの哲学者の思想を正しく理解するためには、著作をしっかりと研究する

ことはもちろん、その時代の特徴を多角的に把握することもきわめて重要である、ということが分かる。

ポーランド分割に始まり、フランス革命に揺れ、ナポレオン戦争によるヨーロッパ経済の疲弊にあえぐ困難な時代に貿易商社の経営に心を砕いたハインリヒ・フローリスの人生は、実際には想像を絶する心労に満ちたものであったにちがいない。ナポレオンの大陸制圧とともにヨーロッパは一旦安定するかに見えた。しかし続いてフランスはイギリス侵攻をもくろみ、翌1805年3月末になるとイギリス上陸作戦の準備を開始した。フランスの勢力拡大に対抗して4月11日には英露同盟が締結された。これよりヨーロッパは第三次対仏大同盟および戦争再開に向かって再び緊張感を強めていく。貿易商社にとっては、頻繁に変化する政治情勢、それとともに変化する経済環境について、大局的かつ精密な評価と予測と判断とを求められる厳しい日々連続であったろう。その気苦勞のゆえに父親は心身ともに衰弱していった。ショーペンハウアーはそのような父親に憐れみを感じると同時に、父にお構いなくサロンで愛嬌を振りまく（ように見える）母親に憤りを強めていった。ナポレオンがイギリス攻撃のためにブローニュに軍隊を集結しはじめていた4月20日に起こったハインリヒ・フローリスの転落死は、波止場に面して大きく開かれた倉庫上層階からの転落事故で、一般的に起こりうる事故であった。しかしこのような社会状況下では、ハインリヒ・フローリスの死を自殺とする説も否定できない。イギリス上陸作戦のほうは、フランス海軍がトラファルガーの海戦でネルソン提督率いるイギリス艦隊に大敗を喫し制海権を失ったために挫折した。これに対し、ナポレオン率いる地上軍の勢いはすさまじく、10月にウルムの戦いでオーストリア軍を撃破した後、11月のウィーン入城、12月の戦争史に残るアウステルリッツの三帝会戦へと続く。

父の死後もショーペンハウアーは実業家としての修行を続けた。父の死から一年余り経た1806年の5月、喪の明けた母ヨハンナは夫の遺産の分け前をもって、妹アデーレを伴い、ゲーテへの紹介状を手にワイマールへと向か

う。ハンブルクでは母・妹と入れ替わるように、5月末にはル・アーブルの幼友達アンティムがフランスのヨーロッパ拡大の波に乗って移住してくる。あるいはイギリスによる海上封鎖により対外貿易が制限されたル・アーブルからハンブルクに活路を求めてきた、という意味合いもあるのかも知れない。二人は旧交を温め、文学談義から夜遊びまで、多くの時間をともに過ごすことになる。しかし親友との平和な日々は長くは続かなかった。1年後の1807年5月、ショーペンハウアーは実業家としての修行を中止した。ショーペンハウアー商会は解散し、資産は母子3人に配分された。実業界を離れたアルトゥアはこのあと、ワイマールの西に位置するゴータのギムナジウムに入学して、大学入学の準備、ことにギリシャ語、ラテン語の修得に専心するのである。

ショーペンハウアーは少年時代から学問研究に志していたところ、父の強い希望もあって実業の道に進んだのであったから、この決断はいかにも自然で、起こるべくして起こったと考えられるし、ショーペンハウアー自身も後年そのように回想している。しかし、その決断を阻害せず、あるいは容易ならしめた要因はほかにもいろいろあっただろう。人が一つの行為を選択し決断するとき、それを支持したり抑制したりするさまざまな要因がせめぎ合っ



カロリーネ・バルドゥア「ワイマールのヨハンナとアデーレ」(1806年)

ており、支持する要因のうちもっとも優勢なものを私たちは、行為の理由として意識する、とショーペンハウアーは述べている。この主張はなによりもまずショーペンハウアー自身の決断に適用されなければならない。さまざまな要因のひとつは父の死である。しかしそれだけなら、なぜショーペンハウアーは母ヨハンナと同時にハンブルクを去らなかったのか。その疑問に対しては、一旦実業家として尊敬する父の後を継ぐ選択をした上は、それを成し遂げようと決意していたという理由も要因として考えられる。また、父への思いやりを欠く（とショーペンハウアーは思っていた）母親と同じ行動を取りたくなかったのかもしれない。さらに、入れ替わりにハンブルクにやってきた幼友達アンティムとの再会の期待も、ハンブルクにとどまる要因となっただろう。

しかしそれでは、その1年後になってショーペンハウアーがハンブルクを去ることになったことをどのように理解したらよいのだろうか。筆者がここでも注目するのは、その後のハンブルクをめぐる政治的経済的状況の急変である。

1806年、母ヨハンナと妹アデーレとがワイマールに到着してまもなく、それまでフランスに対して中立を守ってきたプロイセンが第四次対仏大同盟結成に加わると、ナポレオンはこれに対抗して中央ドイツに進出し、10月14日のイェナ・アウエルシュタットの勝利の余勢を駆ってワイマールを包囲、占領した。この時ヨハンナ・ショーペンハウアーは持ち前の社交力と知性と財力とによってワイマールの復興に貢献し、短期間にワイマールの重要人物となってゆく。彼女のサロンには、ゲータをはじめワイマールの文人要人が出入りするようになった。

勢いに乗ったナポレオンは10月末にベルリンを占領し、11月21日にはベルリン勅令（いわゆる大陸封鎖令）を発令して、大陸とイギリスとの交易を禁止する。その2日前の11月19日から、対イギリス貿易の要所ハンブルクにもフランス軍が進駐して海上交通を監視すると同時に、すべての商社からイギリス製品を没収した。これらがハンブルクに与えた被害は甚大なものであった。対イギリス貿易の禁止にくわえて、フランスによる追加課税、さらに密輸



ヨハン・マルクス・ダフィット「フランス皇帝治下ハンブルクの眺望」（1811年）

の蔓延により経済と市民生活とは混乱した。多くの商社が倒産し、失業者が増加し、人口流出が進んだ。1800年の人口調査で約13万人いたハンブルクの人口は、フランスの占領が終わる1814年には5万5千人にまで減少している。こうした危機的状況の中で、ショーペンハウアー自身も、ハンブルクと商会との将来におおきな不安を感じたことだろう。それがショーペンハウアーの、実業家から学者への転身を後押しした重要な動機となったと筆者は考えている。

このような判断を下すにあたって、ショーペンハウアーはハンブルクの実状を、現地で身をもって知ると同時に、取引仲間の情報や『タイムズ』の購読を通して各国の動きも把握していたことだろう。母ヨハンナも、次第にショーペンハウアーにハンブルクを離れるように誘導する内容の手紙を書くようになる。手紙には、政治経済に関する言及はなく、学問に強い関心をもつ息子アルトゥアの願いを叶えてやりたいという母親の思いがこめられているように見えるが、ロシア皇帝家との姻戚関係などの強力な情報網を有するワイマールの宮廷社会にいた、ヨハンナの冷静な状況判断に裏付けられていたものであったろう。

## 5. 哲学者への途 — 『充足根拠律の四方向に分岐した根について』の成立

ハンブルクを離れる1807年、ショーペンハウアーの哲学者としての修業時代が始まる。ゴータのギムナジウムに

入学してわずか2年でギリシャ語とラテン語とをマスターし、大学入学資格を得てひとまず1809年ゲッティンゲン大学医学部に入学する。しかしショーペンハウアーの関心は、ゴットロープ・エルンスト・シュルツェの下で学ぶ哲学に集中するようになる。1811年秋からは、ベルリンに移ってフィヒテに師事する。ショーペンハウアーの学生時代の思想形成については、筆者をはじめ多くの人々の記述があるので、ここでは詳しい説明を省くことにしよう。

ショーペンハウアーの、上記の二人に対する立場を確認するならば、既成の秩序にとらわれずに、あるべき秩序を知力と意志力とによって自由に構想し実現する哲学的新体制を体現したのが第二の師フィヒテであり、その出発点となる『知識学の基礎』は、ジャコバン派の政権掌握と同じ1794年に刊行された。これより2年前に人間理性の自由が理性の横暴とテロとに頹落する危険性を指摘し、いわばフィヒテの思想を先取的に警告批判したのが第一の師シュルツェであった。しかしこの二人の哲学者の思想的な相違は、ショーペンハウアーの心のうちでせめぎ合う、相反する二つの思想 — 世界の存在秩序を自発的に構想する自由と、自由であることが必然的にもたらす孤独、そして孤独からの癒しを求める憧れを代弁するものであった。

既成の秩序を絶対化する抑圧的な旧体制の哲学でもなく、自由の名の下に知的暴力に突き進む新体制でもない、新たな世界の姿を模索したい。そのためにはまず、現状



ゲッティンゲンでのショーペンハウアーの最初の住居  
(林由貴子博士提供)

分析から始めなければならない。すなわち、世界がどのようにして意識されるようになるのか、表象としての世界の成り立ちを明らかにすることが先決である。

人間が判断したり、行為したりする基準は、永遠不変の真理として存在するのか、それとも、人間が自由に決めて行くべきものなのか。人々はそのどちらかを支持しながら、「こちらだ、なぜならば・・・」と議論するだろう。それをショーペンハウアーは、「根拠を問う」という。

「こんなところになぜリンゴがあるのだろうか?」という問いに対しては、「あちらの木から落ちたリンゴの実が転がってきたからだ」という答えも考えられるし、「あなたに食べてもらうためにここに置いたのだ」という答えも可能である。前者は、永遠不変の因果律の必然性を表し、後者は、あなたに食べてもらうという新たな目標設定を表して、自由に現実に変更を加えているのだ。どちらも、なぜ?と問うことができるが、必然と自由とをむやみに混同してはならない。それはある人の自由なイメージを他の人に強制する暴力ともなり得るし、その暴力は更に、自分のために他者を抹殺しても構わないというテロの論理をも生みださうからである。様々な国、様々な文化の多様性を学んだ世界市民ショーペンハウアーにとっては、フランス革命から諸国民の戦争に至るヨーロッパの戦乱は、そうした冷静な観察を忘れた人間の分別の欠如によるものと思われただろう。ベルリン大学では、民族の自治を訴えるフィヒテ(『ドイツ国民に告ぐ』)を中心に反ナポレオンの気運が高まり、学生たちが武器を取るようになると、ショーペンハウアーはベルリンを去る。一旦はワイマールの母ヨハンナのもとに身を寄せるが、母の奔放な生活態度に反発し、更に30キロほど南に位置する静かな城下町ルードルシュタットに退き、新たな思想の醸成を進めるのである。

## 6. ルードルシュタット昔と今

ショーペンハウアーはルードルシュタットの町の西端にあるホテル「騎士館(ツム・リッター)」に約半年間滞在して『根拠律』を執筆する。この論文は1813年10月に完



成し、戦争の渦中にあるベルリン大学ではなく、最寄りのイェナ大学哲学部に博士学位論文として提出された。



『根拠律』執筆当時、19世紀初めのホテル「騎士館」  
ツェツィリア・キルヒナーによる水彩画  
(Stadtarchiv Rudolstadt, Bildarchiv BDe 15/174)

このたび関西学院大学図書館が購入したのは、希少となったこの初版本である。なお、これまで刊行されてきた一般的なショーペンハウアー全集には、1847年第2版の『根拠律』が収録されている。円熟期ショーペンハウアーの軽妙辛辣な加筆がほどこされて、初版に比べてページ数が2倍近くにふくれあがり、刺激的な読み物になっている。しかし、『意志と表象としての世界』の理論的基礎を固める、という本来の役割に即して評価するなら、1813年の初版の方が内容も引き締まり、論旨も明快である。

『根拠律』初版を、当時の哲学史のみならず、政治、経済、文化史全般のコンテキストの中で読み解くことを怠ってきたために、わたしたちは19世紀後半以降に捏造された、一見説得的なショーペンハウアー像から逃れることができなかった。ショーペンハウアー哲学の中核部分を明らかにするためには、初版と第2版との比較を避けて通ることはできない。—それが筆者の若きショーペンハウアー研究を支えてきた信念でもある。

ところで、ショーペンハウアーが処女作執筆の地として、ルードルシュタットを選んだ動機は何だったのか。直接の理由は、母親との不和であった。しかし当然のことながら、その決断には、ほかにも様々な要因が考えられる。

ショーペンハウアーはイギリスのウィンブルドン滞在中、母親からたしなめられるほどにシラーを読みふけっ

ていたという。そのシラーは、ルードルシュタットを愛し、後のシラー夫人シャルロッテと出会ったのもこの町であった。さらに、ショーペンハウアーの尊敬するゲーテとシラーという二人の文豪がショーペンハウアーの生まれた1788年に初めての会見を当地で果たしている巡り合わせに心惹かれたかも知れない。会見の場所は、騎士館から北に歩いて数分のところにあり、さらにシラーの住んでいた家は騎士館の筋向かいであるという符合も、上記の推測を支持するものとなる。そして、穏やかな起伏のゆったりとした丘陵地帯に囲まれたこの静かな城下町が、戦乱の喧噪に疲れたアルトゥーアの揺れ動く感情を鎮め、癒やしてくれたことであろう。



ゲーテとシラーが会見した家とハイデックスブルク宮殿

しかし、『根拠律』が完成した秋頃には、各国の軍隊がルードルシュタットを通過するようになって、町の静けさも失われていった。翌1814年春にドレスデンに移住するまでの間、ショーペンハウアーは、再びワイマールの母ヨハンナの家を寄せる。この時期は、母との関係の更なる悪化にもかかわらず、ゲーテをはじめとしたワイマールの文人たちとの交流が活発化していく、実り多い半年でもあった。それぞれに並外れた知性と才能とを備えたヨハンナとアルトゥーアとの関係は、常に緊張に満ちたものであったが、しかし二人は、実務的な事柄についてはそれぞれの強さを活かして助け合い、不思議な母子関係を形づくった。これ以降の若きショーペンハウアーの人生については、『時計台』No.84の拙稿「ショーペンハウアー

『意志と表象としての世界』初版について」(前掲)をお読みいただきたい。

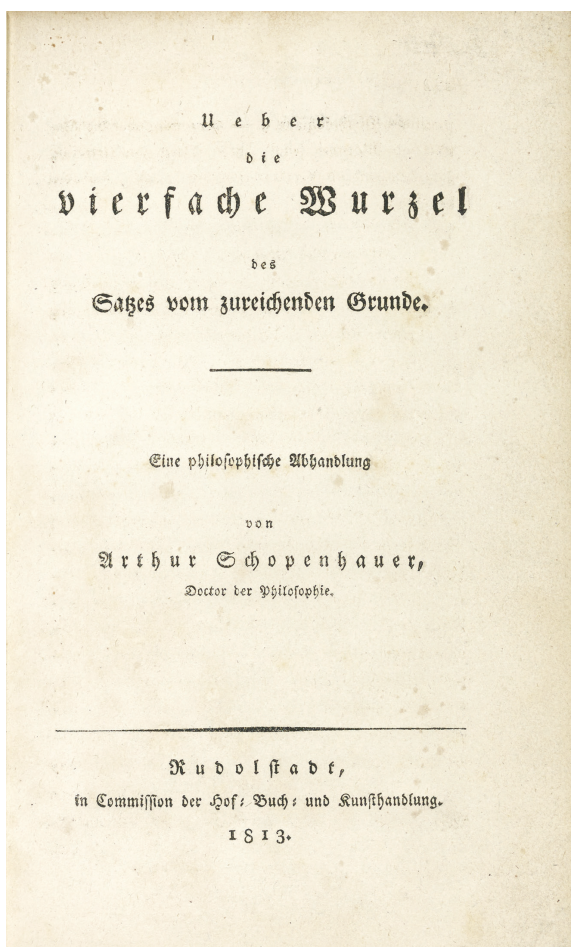
筆者が初めてルードルシュタットを訪れたのは、ベルリンの壁崩壊後の1991年、家々の煙突から褐炭の煙がたなびき、油煙のノスタルジックなおいが漂う冬の季節であった。ショーベンハウアーの逗留した騎士館は、「活動家(アクティヴィスト)」という社会主義の東ドイツらしい名前の映画館に模様替えされていた。『根拠律』刊行200周年にあたる2013年に再びこの町を訪れたときには、ルードルシュタットはすでに西側の再開発の波にあらわれ、その場所には今風のショッピングセンター「ガレリア」(右下の写真)が建っていた。コンコースの壁に、取り壊された「旧映画館」の写真(右上の写真)が掲げられていたのは慰めであった。私はセピア色のおっとりとしたその騎士館の壁に、22年前に見た白と緑のけげげしい壁の色の記憶を重ねた。



映画館「アクティヴィスト」(1972年)  
(Copyright Foto Lösche Rudolstadt)



ショッピングセンター「ガレリア」(2013年)



『充足根拠律の四方向に分岐した根について』  
初版(1813年) 標題紙

### 鎌田 康男 (かまた やすお)

関西学院大学名誉教授 Dr. phil.

著書:

- (1) *Der junge Schopenhauer. Genese des Grundgedankens der Welt als Wille und Vorstellung* (若きショーベンハウアー。意志と表象としての世界の根本思想の生成。単著、Freiburg/München: Alber, 1988)
- (2) ショーベンハウアー哲学の再構築。『充足根拠律の四方向に分岐した根について』(第1版) 訳解(共著、新装版2010年、法政大学出版局叢書ユニベルシタス)

論文等:

- (1) 「構想力としての世界 — カント『純粹理性批判』演繹論の受容から見る初期ショーベンハウアー哲学の再構築 —」『理想』第687号 特集 ショーベンハウアー哲学の最前線(単著、2011年) pp. 2~22
  - (2) 「ショーベンハウアー」『哲学の歴史9巻 反哲学と世紀末【19-20世紀】』責任編集: 須藤訓任(中央公論新社、2007年8月) pp. 175~214
  - (3) „Der Handschriftliche Nachlass und der junge Schopenhauer“ (遺稿と若きショーベンハウアー), in: D. Schubbe, M. Koßler (Eds.), *Schopenhauer Handbuch* (ショーベンハウアー・ハンドブック), Stuttgart - Weimar: Metzler, 2014, pp. 156~166
- その他の日本語・ドイツ語・英語著書論文等: <http://kamata.de/gyoseki/> 参照

ショーベンハウアーの重要著作

- (1) ショーベンハウアー『意志と表象としての世界』西尾幹二訳、全3巻、中公クラシックス、2004年
- (2) ショーベンハウアー『幸福について 一人生論』橋本文夫訳、新潮文庫、1958年
- (3) 『ショーベンハウアー全集』全14巻別巻1、白水社、新装復刊版、2004年